



三毛猫
次郎の短い一日



わしは、猫の次郎。

今日はわしの短い一日についてお教えしよう。

おっと、その前にわしについて話さねばならぬ。

わしは野良猫の三毛である。

三毛と言ってもただの三毛じゃない。驚く無かれ。わしの背中には綺麗な形をした、黒いハートマークがあるんじゃよ。黒いハートじゃが勿論、心は温かい。

そのおかげで我ながら、子供達には人気があることを自覚しておく。

どうじゃ、すごいじゃろ。

わしには兄弟がおる。黒猫の小次郎。

兄弟と言っても親は違う。じゃが生まれて間もない頃から、いつでも一緒じゃ。小次郎はどこへ行く時もわしに付いて来るんじゃ。

可愛いのう。

わしの出生地についても話さねばならぬ。わしの出生地はの、高架下の段ボールじゃ。なぜか分からぬが気が付くとそこにおった。母上は一体、どこへ行っていたのか分からぬ。

あれはの、朝から雨の降り続く寒い日じゃった。

わしが空を見上げておると小学生の女の子二人が、こちらに向かって近付いて来たんじゃ。その女の子達、何と誘拐犯だったんじゃ。わしは誘拐されたんじゃよ。

その女の子達の家へと連れて行かれたんじゃ。

いや、無理やり連行されたと言った方が適切じゃろうかの。



その女の子達は姉妹での、わしは牛乳を与えられて生かされたんじゃ。誘拐犯にしては随分と親切じゃった。わしは誘拐されるのも悪くないと思ってしまったわ。

じゃが不覚だった。

その父上は優しくかったんじゃが、母上がのう、臭い汚いの一点張りじゃった。今でもはっきりと覚えておる。わしは少なからず傷付いたものじゃ。

そうして悲劇は続くんじゃ。

その日の夜の内にわしは解放されたんじゃがの、何せ段ボールの蓋を閉じられた状態で連行されていたからのう、わしが一体どこから来たのか分からなくなってしもうたんじゃ。しかも夜になってもまだ雨が降り続いておった。わしはびしょ濡れになりながら母上を捜したんじゃ。

その時じゃ、世にも恐ろしい物を目にしたんじゃよ。

それはの、恐ろしい程の轟音をたてながらわしに近付いて来たんじゃ。

ゴォーと、とても速くてわしの足では到底付いていけぬスピードじゃった。最近知ったんじゃが人間の間ではそれを、「車」と呼ぶそうじゃ。

いわゆる「車」は、寝ている静かな時は良いんじゃが、鼻息が荒くなっている時は至って危険じゃ。また夜になると目が光り出すから、尚恐ろしい。

一体「車」を飼い馴らす人間というものは、どういう力の持ち主なんじゃ。



すまぬ、少し話が逸れてしもうた。えっと、どこまで話したかのう。

おうそうじゃ。

それでのう、その日は母上を捜すことは諦めたんじゃ。

さて、取り敢えず寝床を捜さねばならぬ。わしはとにかく誘拐犯の家から、遠くへ遠くへと歩いて行ったんじゃ。

その時気が付いたのが、驚いたことに誘拐されたままのうのうと暮らしておる猫がおるとのことじゃ。

たまたまあの恐ろしい「車」が前方から迫って来てのう、わしは水を掛けられることが必至だったから塀の上へ飛び乗って避けたんじゃ。

すると窓辺に座る、人間に囚われておる白猫とちょうど目が合っただの、何をしておる、こっちへ来いと手招きしたんじゃが、知らんぷりされてしもうた。

すると恐ろしいことに人間が来て、その白猫を抱き上げて奥の方へ連れて行ってしもうたんじゃ。

後で知ったんじゃが、わしらのような生活をしておる者を「野良猫」、人間と生活をしておる者を「飼い猫」と呼ぶそうじゃ。

これは人間が決めた呼び方で不愉快に思っておったが、今となっては案外名乗る時にも便利じゃからの、この呼び方も受け入れておる。

はて、わしはどのくらい歩いておったんじゃろうか。

ともかく寒くて寒くて、早く寝床を捜さねば死んでしまうと考えておった。

そんな時あの可愛い弟、黒猫小次郎と出会ったんじゃ。

小次郎は生まれた時の記憶が無いんじゃ。じゃから、実のところ年齢が分からぬ。つまりもしかしたら小次郎の方が兄上なのかもしれぬ。じゃが、なぜ小次郎がわしのことを「兄上」と呼ぶ様になったかという、それはの、喧嘩じゃ。

わしは全く地理が分からなかったからの、知らぬ間に小次郎の縄張りに入ってしまったんじゃ。

先に手を出してきたのは小次郎の方じゃった。

不意に暗闇から猫パンチを浴びせてきおったんじゃ。

初めは何て卑怯者じゃと思ったわい。名も名乗らずいきなり背後から攻撃とはのう。わしはすぐに振り返って応戦したんじゃ。

暫くの間は睨み合いが続いておった。

小次郎の目付きはなかなか鋭いものじゃった。

わしも迂闊には手は出せぬ、暫くの間は気迫の勝負が続いたわい。

その時じゃ、急に人間の家のドアが開いたんじゃよ。その瞬間、美味そうな魚の匂いがして来てのう。わしは小次郎の一瞬の気の緩みを見逃がさず、一気に猫パンチを浴びせてやったんじゃ。

すると小次郎は、尻尾を丸めて降参しおった。

わしは降参した者を痛めつける程、不良猫ではないからの、それ以上は攻撃しなかった。

わしの勝利が決定した瞬間じゃった。

それ以来というもの、小次郎はわしのことを「兄上」と慕っておる。

はて、その時に出てきた人間はの、「与っさん」という男じゃ。年は三十代前半というところじゃろうか。なぜ与っさんという名前なのは分からぬが、人間の間ではそう呼ばれておる様じゃ。

この与っさんはの、とても親切じゃ。

猫と人間の間でこれ程の友情はなかなか育めまい。小次郎もわしも随分とお世話になったものじゃった。

この時も与っさんは小次郎に魚を持って来てくれていたんじゃよ。

何でも小次郎は以前からこの与っさんに、魚を毎日貰っていたそうじゃ。

その時わしは与っさんと初めて知り合ったんじゃが、何とわしの為にももう一匹魚を持って来てくれたんじゃ。わしは与っさんの情けに甘えることにして魚を食べた。その魚の味は今でも忘れぬ。後にも先にも、一番美味しい魚じゃった。

それ以来というもの、わしはこの与っさんと小次郎と深く付き合っておる。



ここで与っさんの家についても少し話しておこう。

与っさんの家の道路側にはの、でかい魚が壁からぶら下げられておるんじゃ。その魚の大きさと言ったら何と説明して良いのか分からぬ。ともかくでかい。わしが食われてしまう程じゃよ。

与っさんの家のはの、日中になるとなぜか沢山の魚が並べられるんじゃ。それが食う為では無い。綺麗なキラキラ輝く物と交換して人に与えてしまうんじゃよ。



あのキラキラ輝く物を一度で良いから食べてみたかったんじゃがの、あれだけは与っさんも大切にしていたと見えて、一度も食わせてくれなかった。

しかし魚を頂戴していた身ゆえ、贅沢だけは慎まねばならぬ。

おっと、勘違いしてほしくないんじゃが、わしと小次郎もただ魚を頂戴していた訳では無かったんじゃよ。言わばわしと小次郎は、護衛隊じゃな。

時たまのう、何処ぞの不良猫どもが与っさんの魚を盗みに来たんじゃ。

そんな時はわしらの出番という訳じゃな。

わしと小次郎で協力して不良猫どもを追っ払ったものじゃ。

そのわしらの活躍ぶり、御主にも見せてやりたかった程じゃよ。

そうして与っさんの家の平和を保っておったんじゃ。

まあ、時たま小次郎が誘惑に負けて魚を食おうとしたんじゃが、そんな時はわしが止めに入ったもんじゃ。

実はここだけの話、わしもたまには誘惑に負けてしまいそうになったことはある。しかしそこはグッと堪えて我慢したもんじゃ。

一種の修行じゃの。

さて、随分長く話してしまおうたがわしの出生と小次郎、与っさんとの出会いについては分かってもらえたかの。



これからはその後について話をしよう。

小次郎と与っさんに出会った次の日から、わしは再び母上を捜すことにしたんじゃ。その日は晴れ、絶好の捜索日和じゃった。

勿論その日から小次郎も付いて来る様になったんじゃ。

小次郎はなかなか頼もしい者での、小次郎一匹付いて来てくれれば、わしと合わせて百猫力よ、そう思っとった。

わしらはまず初めに昨日の誘拐犯の家まで戻ることにしたんじゃ。

わしが先に歩き、その後を小次郎が付いて来る。

夜、雨の中歩いた道じゃったからの、何度か間違えてしまおうた。じゃが小次郎には何とか気付かれんかった様で安心したものじゃった。

さて、誘拐犯の家の前に着いたは良いが、その後のことを考えておらんかった。

取り敢えずわしと小次郎は母上も誘拐され連行されて来るかも知れぬから、家の近くで張り込みをすることにしたんじゃ。

しかし待てど暮らせど、一向に何も起こらんかった。

そこでわしは小次郎を見張りに立たせたまま家の中へ侵入を試みることにしたんじゃ。抜き足差し足で音の出ぬ様に爪は仕舞い込んで、十分間に五メートルずつ進んで行ったわい。

誘拐犯の家の門まで来た時、少し振り返って小次郎の様子を見たんじゃが、ちゃーんと見張っておって、心底、感心したものじゃった。

さて、門の前まで辿り着いたわしは、門を思い切り飛び越えて誘拐犯宅へ侵入したんじゃ。

その時じゃ。

わしのことを監視しておったのか、姉妹の母上が丁度ドアを開けて出て来おっての、しかも手には棍棒に何者かの毛を植え付けた凶器を持っておったんじゃ。

わしはその時ばかりは少し慌ててしまっただのう。母上は何やら奇声を上げて棍棒を頭上高く振り上げておった。



まさに正気の沙汰では無い。

わしは身を翻して門を飛び越えようとしたんじゃが感覚が鈍っての、後、数センチのところまで門に腹が当たってしもうて、再び誘拐犯の縄張りに落っこちてしもうたんじゃ。

その瞬間、母上が振り下ろした棍棒がわしの自慢の髭をかすめおったわ。わしは絶命かと思ったわい。

その時じゃ。

小次郎がわしのことを助けに来てくれたんじゃよ。

小次郎が塀の上に来て母上の気を引いている隙に、わしは家の脇の方へ回り込んで塀を飛び越え脱出し、難から逃れたのじゃ。

わしと小次郎はすぐに合流し、お互いの安否を確かめたものじゃ。

その時からわしは、この小次郎の為なら命をさえ捨てても構わんと覚悟を決めたものじゃよ。またそれと同時に、小次郎に危険な思いをさせてしまったことを本当に申し訳なく思った。

以後、軽率な行動はとらず慎重を心掛ける様にしたんじゃ。

それにしてもあの母上の行動と言うたら本当に、狂気の沙汰じゃった。

何故、この次郎に恨みがあるのか分からん。

第一、初めにわしのことを母上の家へ入れたのは他ならぬ、母上の娘ではなかったか。

あの狂乱には命がいくつあっても足らん。

小次郎にも本当に怪我が無くて良かったと心底思ったものじゃよ。

その日から数日間、家の周りで張り込みをしたんじゃが、小学生の娘が二人出入りするばかりで、とうとうわしの母上は連行されては来なかったんじゃ。

わしはガッカリしてしもうて母上は一体どうしているのだろうか、心配で心配で堪らなかったわい。

そこで次からは、町中で聞き込み捜査をすることにしたんじゃ。

日中は町中を歩き回って、夜になったら与っさんの所へ戻って魚を頂戴する。

そんな日々が続いたわい。

数日後、ある日のことじゃった。

わしはまた、あの飼い猫の白猫と窓越しに会ったんじゃ。

あの白猫にもわしの母上のことを知らんか尋ねてみることにしたんじゃよ。

まず、わしらの方から名乗った。野良猫の次郎と小次郎であると。

すると白猫め、わしらのことを不思議そうに見とった。

わしらも不思議そうにこちらを見てくる白猫を、不思議そうに見とったわ。

すると白猫、そなたらは何故野良猫なんじゃと尋ねてきおったんじゃ。

わしらの方が聞きたいわ。

わしらも聞き返してやったんじゃ。何故飼い猫なんじゃと。

間を置かずに白猫、あたいは「血統書」付きの貴族猫だと抜かしおった。
だから飼い猫として大事にされておるんじゃと。
わしは「血統書」の意味が分からなかったが、白猫、何やら出身地はどこぞの外国と言
っておったわい。

話が長くなりそうじゃったから遮って、わしの母上の居場所を知らんか尋ねたんじゃが
一秒も待たない内に、知らんと言ってきおっての、飼い猫の無礼に少々腹が立ったが、
ここで争う訳にはいかぬ。わしらは他を当たることにしたんじゃ。

じゃが去ろうとすると、ちょっと待ていと言うんじゃ。

この白猫、どうやら人間に洗脳されてしもうていたらしい。
話を聞くと驚いたことに一度も家から出たことが無いと言うんじゃ。わしはこれを聞いて
哀れに思うての、この白猫の先程の無礼も許すことにしたんじゃ。

少しは飼い猫どもについても知らねばならぬから、話をすることにしたんじゃよ。

まずわしらがなぜ野良猫かということをお話することにしたんじゃが、そんなことわしらと
て知らなかった。だからわしの生い立ちについて話したんじゃ。
白猫の奴、分かったんか分からんのか分からんが、ほうほうと聞いておった。

誘拐犯のこと、狂気の沙汰の母上のこと、小次郎との出会い、勿論、与っさんのことも
話してやったわ。与っさんから毎日貰う魚のことを話しておった時、白猫がブツブツ話
し始めたんじゃ。

この白猫、魚は時々しか食わん代わりに毎日肉を貰っていたらしい。わしらは毎日魚を
頂戴する代わりに肉は時々しか貰わなかった。確かに肉も美味しいが、やはり与っさん
から貰う魚の味には勝てんはずじゃ。じゃがこの白猫、魚は生臭くて堪らんと言う
んじゃ。



白猫は与っさんから時たま貰う肉とは違って、缶の中に入っとる三百円とか言う種類の肉を貰っておっらしい。

わしは与っさんのことを馬鹿にされているような気になって、再び腹が立ってきてしもうたんじゃ。

それを察したのか白猫、今度は話題を変えてきおった。

何でも白猫、あの恐ろしい「車」に乗ったことがあると言い出したんじゃ。

家からは出たことはないがあの恐ろしい「車」に乗ったことがあるとは、飼い猫もなかなかやるのうと悔しいが思ったものじゃ。

話が段々、面白うなってきたのう。

白猫が言うにはあの「車」、人間が「鍵」と言っとる物で従うらしいんじゃよ。「鍵」と言う物はどんな身形をしているのか白猫に聞くと、キラキラした小さい物らしい。

まさか与っさんが魚の代わりに回収しておる、あのキラキラ輝く物か。

ははあん、与っさんが「車」を飼い馴らす為に、あのキラキラした物を大事にしておることが良く分かったものじゃよ。

しかしあれが食べ物ではなかったとはわしはとんだ勘違いをしておったものじゃな。白猫が言うには「車」に乗ると、何でも楽に遠くの方へ行けるらしいんじゃ。

何と言っても、その爽快感が堪らんと言っておった。

ところでこの白猫、名は何と申すんじゃと思って聞いてみたら、「ペルシャ」だそうじゃ。何とも言い難くて堪らんかった。

それにしても何とお上品な御名前じゃろうか。

さすがに生まれが外国と言うことだけのことはある、そう思ったわい。

その時じゃ、突然ペルシャがおった部屋のドア開いたんじゃ。

すると、二十代の人間の御嬢様が部屋に入って来おっの、わしと小次郎は一瞬身構えたんじゃが、何のことは無い。御嬢様は武器を持っておらんかったから、こちらに攻撃を仕掛けてくることは出来なかったんじゃよ。

わしらは様子を伺うことにした。

すると御嬢様、塀の上におるわしらに気が付いて窓際まで近寄って来たかと思うと、窓を全開に開けたんじゃ。

何やら、わしらに向かって話し掛けておった。

これがどういうことを意味するか、御主に分かるかの。

今がペルシャにとって最大のチャンスゆうことじゃ。

わしらはペルシャに向かって野良の世界に来ないかと必死に呼び掛けたんじゃ。じゃがペルシャは初め迷っておった。

確かに飼い猫は不自由無く暮らせるかも知れぬ。

じゃが野良猫は、「自由」じゃ。

ペルシャが一步踏み出せばそこは別世界じゃ。

ペルシャ、こっちに来ぬか。わしは必死に呼び掛けたんじゃ。



自由
Freedom

ペルシャは迷っておったが、一度御嬢様の方をチラリと見たかと思うと決心し、思い切り飛んで塀の上へ飛び移ったんじゃ。

そしてわしと小次郎とペルシャは、その場を立ち去った。

「ペルシャの大冒険」というところじゃな。



町なかを歩いておるとペルシャは見る物全てが珍しいらしく何でも聞いてきおった。わしも初めは懇切丁寧に説明してやっていたんじゃが、徐々に疲れてきてしもうて、途中から小次郎に代わって貰った程じゃよ。

与っさんの家の前も通り掛かったの、与っさんの所有する魚のコレクションも見せてやったんじゃ。

するとペルシャは大層感激してのう、あの赤い魚は何じゃと言うから、あれはな「鯛」って言うんじゃよと教えてやったんじゃ。

ペルシャは初めて見たと「鯛」の赤さに驚いておったわい。

わしらも何だか嬉しくなってきたの、ペルシャを連れて来てやって本当に良かったと思うたものじゃった。

じゃがペルシャにとっての冒険の代償は大きいものだったかも知れぬ。

その時にその光景をわしと小次郎も初めて見たんじゃが、何とも信じられぬ。この世で一番恐ろしい光景じゃった。

それはな、誘拐犯どものアジトだったんじゃよ。

しかも、生まれたばかりの可愛い子猫達ばかり誘拐しておった。



いや猫だけでは無い、子犬も小鳥も、はたまた見たことの無い奇妙な小動物までもが誘拐の対象とされておったんじゃ。この光景にわしも小次郎も目が点になって、動けなくなってしまうた。

暫くすると次に腹の底の方から大きな恐怖が湧いて来て、手足の震えが止まらなくなってしまったんじゃ。上を見上げると大きな犬と猫が仲良さそうにして、こちらの方をニコッと嘲笑うかの様に見下ろしておったわい。

そのガラス張りの家の中における様々な動物の子供達は、それぞれ別のケースに入れられておっての、わしの推測じゃがそのケースはきっと洗脳装置じゃ。

わしらが人間どもに従順になる様に何やら音楽を流し続けておるのかも知れぬ。又は空気に催眠薬でも混ぜ込んで、吸わせておるのかも知れぬ。 いずれにしても洗脳されてしまった子供達の行く末はきっと、頭上におったあの犬や猫のようになってしまうのじゃよ。わしと小次郎は自然とたじろいでしまったわい。

じゃがペルシャだけ取り憑かれた様に動かなくなってしまったな。

しまった既に遅かったか、気付かぬ間に変な光線でも浴びせられたのじゃろう、そう思っただけで、ペルシャ早く洗脳から覚めるんじゃと大きな声でわしらは言うたんじゃ。

と、ペルシャ、こちらを向いたかと思うと深刻な顔をしておった。

ペルシャが奴らの洗脳と戦っておることはわしらにもすぐに分かったんじゃ・・・というのは勘違いじゃった。 ペルシャは洗脳されてはおらんかった。

代わりにその時、生まれた頃の正確な記憶が蘇ったらしいんじゃ。

何でもペルシャによると、出生地は外国と聞いていたが、実際はこの誘拐犯のアジトだったらしいと言いだしたんじゃよ。

本当かと聞くと真顔で本当じゃと言う。

子猫達のケースの上に掛けられておる薄い紙っぺら、あの「血統書」が証拠じゃと言うたんじゃ。

何や、「血統書」いうのは薄い紙っぺらかと思うたがそれどころでは無かったわ。ペルシャは少なからず心とプライドが、ズタズタにされてしもうた様子じゃった。

何よりも誇りにしておった「血統書」いう物がただの薄い紙っぺらだったということに加えて、出生地が外国と思って自分が特別な存在であると思っていたのに、ただの誘拐犯のアジト出身だったという事実が、ペルシャの心を引き裂いたんじゃないやあ。



わしと小次郎はその時、何も声を掛けてやることが出来なかった。

わしは飼い猫も野良猫も出身地なんかどうでもええと思うとる。

「血統書」だってどんな価値があるのか知らんが、それもどうでもええ。ただ、その生き様が全てじゃ。

じゃがそれぞれに育ちも違えば違う価値観もあるからのう。

落ち込みながら歩いて立ち去るペルシャの後ろ姿を、ただ見守ってやりながら付いて行くことしか出来なかったんじゃないや。

暫く歩いてから小次郎がペルシャに声掛けて、今晚は与っさんの家へ来ないかと言うたんじゃないや。

わしもそれは名案じゃと思うてな、与っさんならペルシャにも親切にしてくれるだろうし、与っさんの魚でも食えばまたペルシャも元気になるだろうと思って、みなで行くことにしたんじゃないや。

それで与っさんの家に着いての、与っさんが魚をくれる時間までわしらは待った。

時間になると与っさんがいつも通り出て来ての、ペルシャに気が付くと、もう一匹魚を持って来てくれたんじゃ。与っさんはニコニコしながらわしらのことを暫く眺めておった。ペルシャはの、美味しい美味しい言うて魚を大事そうに食べておったわ。

その次の日のことじゃ。

ペルシャは指名手配されたんじゃよ。

町中の至る所にペルシャの顔写真が貼り出されておった。

わしと小次郎は腹くくっての、ペルシャを死んでも守ることに決めたんじゃ。

移動する時はペルシャを真ん中に挟んで、周囲を警戒しながら進んだわい。

わしは人間のことを許せなかった。

ペルシャの気持ちをここまでズタズタに引き裂くとは、断固として戦わねばならぬ。

数日間、警戒の日々が続いたわい。

そんなある日、わしらは遂に町なかであの御嬢様に見付かってしもうたんじゃ。

御嬢様は恐らく御父上様が操っていると思われる「車」から出て来おった。

わしは多少「車」に怯んだが逃げるわけには行かぬ。

先にペルシャと小次郎を逃がして、わし一匹で御嬢様に立ち向かって行ったんじゃ。

すると御嬢様の御父上様も「車」から降りて来ての、御嬢様の為にわしに戦いを挑んできおったんじゃ。

まさに、男と男の戦いじゃった。

それぞれに守るべき者がある戦い程、悲しいものは無い。

じゃが、負けられんのじゃ。

わしが先に御父上様の股下に入り込んで、一気に猫パンチを浴びせたんじゃ。

この時ばかりは爪を剥き出して、立ててやったわい。



すると御父上様が怯んだもんじゃから、わしはその際にそこから逃げたんじゃ。御嬢様を傷付ける様な猫道に反することはせん、初めからその様なことをするつもりは無かつたんじゃ。

わしは声を頼りにペルシャと小次郎と再び再会した。

じゃが御嬢様の「車」がまだ付近をうろつき回っておったからの、油断は出来んかった。わしらは「車」の通れない細い小道を選んで進んで行った。

じゃがどうしても広い道を横断せねばならぬ場所があつて、その時運悪く再び御嬢様に見付かってしもうたんじゃ。

御嬢様達は作戦を変えたらしく、機動的な御嬢様と素早く移動出来る御父上様の「車」に分かれてきおった。御嬢様は小道に入り込んで来て、わしらの後を追って来た。わしらも必死じゃが御嬢様もペルシャを取り戻そうと必死じゃった。

小道を抜けた瞬間、御父上様の「車」が行く道を塞ぎおつたが、わしらは「車」の下を潜り抜けて再び向かいにある小道へと入って行ったんじゃ。

御嬢様は執拗にわしらを追って来た。正確にはペルシャを、じゃがな。

しかし進んだ先は行き止まりだったんじゃよ。

塀に囲まれてジャンプしても到底上には届かぬ。

小次郎が身代わりになろうと申し出たが小次郎を死なす訳には行かぬ。それならばわしが身代わりになるべきじゃ。じゃがそれは小次郎が許さぬ。ペルシャがあたいが捕まれば二匹は助かるじゃろうと申し出たが、それはわしと小次郎が許さぬ。

とうとう御嬢様の足音が近付いて来おつたんじゃ。

わしらは近くに転がっておつた錆びた馬鹿でかい二つの空き缶の裏に、三匹揃って隠れることにしたんじゃ。・・・じゃが、すぐに見付かってしもうた。



御嬢様がこちらに向かって何やら喋り掛けておった。

わしらはお互いを見合った。

その時ペルシャが、あたいはやっぱり飼い猫として御嬢様の所へ戻るべきなんじゃと言
い出した。何を言っておる、それで幸せかと聞いたらちょっとの間があって、ペルシャ
はそれでもあたいは幸せじゃと言い放った。

わしは少し混乱しておったわい。

ペルシャは御嬢様のことを嫌いな訳では無いと言うんじゃ。

ペルシャはペルシャなりの覚悟を決めた様じゃった。

小次郎はそれを察して何も言わなかった。奴はなかなかの男じゃ。

わしももうそれ以上はペルシャのことを引き止めなかった。

最後にペルシャはわしらと一緒に数日間は本当に楽しかったと言い、わしらに感謝の言
葉を述べた。そうして付け加えて、与っさんの魚は今までで食べた物の中で一番美味か
ったと言うた。わしはその言葉がとても嬉しかったんじゃ。

そうじゃったろうと最後に一言だけ返して、ペルシャは御嬢様に捕まった。

御嬢様はわしと小次郎に向かって至って穏やかな口調で、何やら一言二言話した後、ペ
ルシャと共に去って行ったんじゃ。

それでペルシャは行ってしもうた。

数日後、ペルシャがおるはずの御嬢様の家へ行ったんじゃが中は空っぽで、人の気配も
猫の気配も無くなっておった。

どうやら、どこぞの町へと移り住んだらしいのじゃ。

ペルシャと最後に交わした言葉が「そうじゃったろう」という短い言葉だけになってし
もうたが、ペルシャが日本一の立派な飼い猫としてどこかで生きていてくれればそれで
良い、そう納得したんじゃ。

寂しくもあったが、男は泣かぬ・・・。

「三毛猫次郎の短い一日（1巻）」

おしまい